



# 全国草原再生ネットワーク

ニュースレター vol. 32 (Oct. 2017)



都井岬の馬追い（宮崎県串間市／秋田優氏提供）

## 第12回全国草原サミット・シンポジウムに向けて

### 第12回全国草原サミット・シンポジウム in 串間・川南大会

#### 第2回実行委員会を開催しました

(中村正樹：川南町教育委員会)

平成29年7月14日(金)に宮崎県串間市役所において第12回全国草原サミット・シンポジウム in 串間・川南大会第2回実行委員会を開催しました。

第1回会議で協議した実行委員会役員体制、事業計画、収支予算及びイベントの内容について再度確認し、今回は役割分担を主な協議事項としました。

役割分担については、シンポジウム部会(串間市担当)、サミット部会(川南町担当)に分かれて、各々内容を検討し、次回の実行委員会に提案することで決定しました。

1月中旬に参加受付を開始予定としており、それまでに大会テーマや各種内容の決定など順次準備を進めていきます。

次回、第3回会議は、10月に宮崎県公立大学で開催し、各部会からの報告を受け、内容の詳細について協議する予定です。決定した内容については、随時お知らせしていきます。



### 第12回全国草原サミット・シンポジウム串間・川南大会日程

【開催地】 宮崎県串間市、川南町

【開催日】 平成30年5月12日(土)～14日(月)

【日程詳細】 12日(土)：シンポジウム(基調講演、分科会)(会場)串間市

13日(日)：現地見学会(都井岬(串間市)及び川南湿原(川南町))  
交流会(会場)川南町

14日(月)：分科会及びサミット(分科会、サミット)(会場)川南町

若葉薫る緑の美しい時期に開催する予定となりました。開催地である串間市と川南町は宮崎県の南部と中部に位置しており、距離にして約100km、移動時間にして約3時間の位置関係にあります。

現地見学会は、野生馬で有名な都井岬、希少種の宝庫と言われる川南湿原植物群落を予定しています。移動時間が長くなる予定ですが、素晴らしい場所をご案内しますので、多くの皆様のご参加をお待ちしております。

#### ■宮崎県川南町について

川南町は、総面積90.12平方キロメートル(東西約12キロメートル、南北約10キロメートル)、日向灘に面した宮崎県のほぼ中央にある人口約16,000人の町です。

海や山などの自然環境に恵まれており、全国各地から農業を志す人々が集まり拓かれたことから、「川南合衆国」と呼ばれ、畜産を中心に全国でも有数の

農業生産量を誇っています。面積の約4割を農用地が占めており、農業を主産業とする自然豊かな町です。

観光面については、年間を通じたイベントにより観光集客を見込んでいます。特に、平成18年度にスタートした商工会主催の定期朝市「トロントロン軽トラ市」(毎月第4日曜日8:00～11:45開催。軽ト

ラックなどの荷台に野菜や果物、海産物などを載せ、販売する定期朝市は、全国三大軽トラ市の一つに数えられ、出店数、来場者数、開催数（出店 140 台、来場者 10,000 人を集客する。）が日本一であり、本町の名物イベントとして定着しています。



軽トラ市の様子

**第 12 回全国草原サミット・シンポジウム in 串間・川南プレイベント  
「サムライの野生馬を追う！都井岬馬追い」が開催されました！  
（秋田 優：串間市商工観光スポーツランド推進）**

宮崎県串間市の最南端に位置する都井岬は、江戸時代初期から高鍋藩の牧場が開かれ、軍馬の生産が行われていました。その当時から続く在来馬が野生化したものが国指定天然記念物の岬馬です。現在、約 550ha（純草地は約 50ha）の面積に、およそ 110 頭の岬馬が周年自由放牧・自然繁殖で生息しています。

去る 9 月 23 日、この都井岬で「全国草原サミット・シンポジウム in 串間・川南大会」のプレイベントとして、『都井岬馬追い体験』が開催されました！馬追いはもともと、前述の高鍋藩が、ここで生産された馬を捕獲・搬出するために始めた伝統作業で、現代では岬馬の保護活動として続いています。南国宮崎の海を望む草原に、人海戦術で馬の群れを追う風景は、とても雄大なものです。

今回のプレイベントは、江戸時代から続く伝統作業であり、かつ文化財の岬馬を守る活動でもある「馬追い」に参加できる！という企画で、東京、大阪、京都、千葉、神奈川、大分、鹿児島、宮崎など、全国から多くの方に参加を頂きました。

作業は、保存会である都井御崎牧組合（といみさきまきくみあい）が主導して参加者を引率し、草原に人の垣根を配置してから馬の群れを追い込んで、一時捕獲のための柵内に誘導します。岬馬は、一夫多妻のハーレム群を形成していて、その家族群ごとに追い込んでゆく必要があります。複数の群れを一緒に捕獲しようとする、それぞれのハーレム牡（種牡馬）同士がケンカをして、途中で群れがバラバラに散ってしまいます。また、馬は集団で走る動物で、特に先頭の馬に追従しようとする性質が強いため、



都井岬の風景



作業前の様子



ウマを追い込むための人の垣根

群れの行方を見極めるには、先頭の馬の鼻先を注視する必要があります。先頭の馬さえ捕獲柵に入れば、あとの家族も追従して入ります。つまり、先頭の馬を逃がさないことが、この作業の重要なポイントとなります。

馬追いでは、野生馬の性質を把握した上で、参加者の連携を密にしながら作業を進める必要があります。都井岬で育った岬馬は、急な斜面の芝草原でも平気で走る能力がありますし、環境に対する知識も豊富で、森の中には多数の獣道や抜け道があり、捕獲作業はまさに人と馬との知恵比べとなります。

こうして捕獲された岬馬は、宮崎大学獣医学部の協力で寄生虫の駆除が行われます。この活動で、特



馬追いの様子

に子馬の生存率が改善され、岬馬は順調に数を回復してきた経緯があります。寄生虫駆除の他にも、1才になった若駒には、個体識別のための凍結烙印とマイクロチップの注入が行われます。凍結烙印は、液体窒素を用いて体毛の色素を作る組織を死滅させ、烙印部分に白毛を再生させるものです。超低温で痛覚が麻痺するため、馬が苦痛を感じにくいと言われます。成功すると、個体番号の部分がキレイな白い番号となります。マイクロチップは、現在、すべての競走馬に導入されているものと同じで、文化財指定の岬馬であることの証明にもなります。

こうして岬馬は、すべての個体が識別され、戸籍と家系図の情報は、約半世紀分の連続記録があり、現代まで大切に保護されてきたのです。



寄生虫の駆除作業

観光イベントや祭りではなく、今も手作業で野生馬の群れを追うという伝統が、現代の日本に残っているということは、全国的にも貴重で、大変誇らしく思います。この都井岬馬追いは、毎年9月下旬の

週末に実施されるのが恒例となっています。来年も元気な子馬が育つよう、皆様のご参加をお待ちしています！



凍結烙印



個体識別のための凍結烙印

## 各地からの報告

### 開田高原と大桑村の採草地をめぐって

(横田弘子・潤一郎：大阪府在住)

2017年7月27～30日にかけて、長野県木曾地域の草原を訪問しました。在来馬である木曾馬のための草カッパ（採草地）が維持されてきた地域で、歴史・文化的研究も盛んで、とても見応えのあるところです。

開田高原は中山道・木曾11宿が近く、伝馬の需要があったため、江戸時代から木曾馬の仔とりが産業として定着しました。仔馬が貴重な現金収入源であり、加えて畑作に欠かせない厩肥をもたらすことから、風土に合った有畜農業でした。馬はとても大切にされ、厩は人と同じ母屋の最もよい南側に作られました。夏は畑や家を柵で囲い、道や放牧地を馬がのびのびと闊歩していたそうです。

木曾は、木曾ヒノキなどが有名で林業が盛んな土地ですが、開田の山はほとんど草刈り場だと言われていています。この時代、木曾谷の民家は板葺き屋根でしたが、馬を大事にするあまり、野草は馬の餌として茅葺き屋根を作らなかったという記録もあるそうです。

木曾馬の飼育が盛んだった1950年代には、広大な草カッパが広がっており、夏の朝草刈

りや冬季飼料のためのニゴ（刈り干し）づくりが行われていました。草カッパは、春の火入れと秋の採草により維持・利用されましたが、土地を休ませるために半分に分け、その作業を隔年で交互に繰り返す、独特な管理が行われていました。草カッパには、フジバカマ以外の「秋の七草」や、ユウスゲ、マツムシソウ、ワレモコウなどが見られ、かつては盆花として利用されていました。墓地脇の草山にもキキョウが刈り残されていたりして、花を愛する気持ち



河岸段丘に残る草地

が感じられました。

実はごく最近まで、馬と共に暮らす生活を送っている方がおられたそうです。残念ながら、このような伝統的な暮らしは2014年を最後に途絶えてしまいましたが、今も開田高原では河岸段丘の急斜面などに、かつての草カッパの面影を見ることができ、4月末頃には、景観保全や慣習として、地区ごとに火入れが行われています。火入れは地域住民によって防火帯を切ったうえで行われますが、活動の中心はかつての景観や生活を知っている高齢の方で、消防団は待機しているものの、世代間の引き継ぎは順調とは言えないようです。加えて今、木曾馬は地域の宝として「木曾馬の里」で飼育されていますが、放牧地は人工草地となっています。草カッパも採草されなくなったため、ススキがかなり優占し、花も減ってしまったそうです。

一方で新しい取り組みも出てきました。木曾谷のお隣、伊那谷は茅葺屋根の文化ですが、開田高原に残る草地のカヤが良いことが分かり、茅葺職人や地元の方による茅刈りが徐々に広がっているそうです。つまり、かつては茅葺が否定された土地で、今は茅が草原を守っていることになります。このようなところから少しずつ草原への理解が広がり、いつかは木曾馬が悠々と闊歩する、かつての村の姿を見たいと感じました。

開田高原から南に少し離れた大桑村の草原も訪ねました。牛馬のための採草地が入会地から村有地に変わったところで、十数年に草刈が途絶えたあと、2004年に有志による火入れが復活しました。火入れを行っているのは「大田代小田代山焼きの会」です。

現在も牛の飼料として採草されるほか、山菜採りも行われています。多治見市や中津川市には、端午の節句に「カリヤスの葉」で作る黄色いチマキがあるらしく、その原料として女性グループが採取に来ることもあるそうです。尾根に残された



(上から)  
「木曾馬の里」入り口に再現されたニゴ  
墓地の裏山で刈り残されたキキョウ  
木曾馬の里  
大桑村の草原

樹木が大きく成長しており、航空写真で見ると半分以上が樹冠ですが、谷の下から見上げると立派な「草原」です。カリヤスが多く、ワレモコウ、ナデシコ、オミナエシ、キキョウなどが咲いていました。

一方、この大桑村の草原の一部では、3年連続で行政主催の植樹祭が行われており、カエデがたくさん植えられていました。植栽された木の隙間にナデシコやキキョウが咲いているのを見ると、複雑な心境になります。行政としても草地を残す方針は一応あるらしいのですが、ここでも世代間で意識のズレがあるようで、なかなか難しいものだなと考えさせられました。



植樹された樹木の中に咲くキキョウ

## 島根県のご当地バーガーに

(和田譲二：島根県在住)

島根県のご当地バーガーに「さんべバーガー」があります。国立公園三瓶山の北の原と、出雲大社前に店舗を構え、県産食材にこだわったハンバーガーのファンは多く、行楽シーズンには三瓶店に大型バイクが押し寄せます。年間5万個以上売れているそうです。

さてこのお店では、パテを地元産の木炭で焼いているのをはじめ、薪ストーブの普及にも力をいれており、地元産の広葉樹を薪に加工して店頭で販売しています。

昨年、NPO 法人緑と水の連絡会議は環境省のグリーンワーカー事業で、三瓶山西の原の草原再生に取

り組みました。草原の樹林化を防ぐためにヤマザクラ、コナラなど10年生以上の樹木を伐採しましたが、その伐採木を国際ワークキャンプのメンバーで集めてお店に届けたところ、ハンバーガーをご馳走になりました。そうしたご縁から、草原の保全と薪の利用を両輪として進めていくため協力しようということになりました。今年度から「さんべバーガー」の売り上げの一部を、島根県の寄付システムを通じて草原保全のために託していただくシステムができようとしています。みなさまも三瓶山へお立ち寄りの際はぜひお薦めの「さんべバーガー」をお召し上がりください。



さんべバーガー



三瓶産の薪

## 野焼き後継者育成研修会の実施について（火引き育成研修会）

（清野耕平：熊本県在住）

野焼き実施に欠かせない「火引き」（火入れ役）は、地形を把握し風向き等を考慮するなど知識と経験が問われる役目である。牧野組合長を中心に地元が担うもので、ボランティア等で代替することはできない。近年、牧野組合員の高齢化や減少に伴い、火引きの後継者不足は深刻であり、野焼きの継続が危ぶまれる牧野も出ている。そのような中で、熊本県阿蘇地域では、火引き後継者の不足により野焼き中止が懸念される牧野について、地域住民の中から火引き後継者を育成する取り組みを行っている。この取り組みを通じて、地元の管理体制強化を図り、野焼きの安全な実施と継続を通じた草原の保全を目指し、平成 26 年度から野焼き後継者を育成するための研修会（野焼き後継者育成事業）を実施している。平成 26 年度から 28 年度の 3 年間、15 牧野組合において同研修会が開催され、多くの火引き後継者が育成されている。

同研修会の流れについて、以下①～⑤のとおりご紹介したい。

①全体研修及び意見交換会（座学）においては、牧野組合員（火引き、火引き後継者）及び野焼き支援ボランティアが集まり、野焼きを行う上での基本的な火入れの仕方や安全管理について研修を受ける。また、今後、野焼きを継続していく上で、安全で効率的、省力的に作業を行えるかどうかについて等、様々な議論がなされる。各牧野での野焼きの現状や問題点、課題について出され、今後の対策等についても検討される。



全体研修及び意見交換会（座学） 牧野組合（火引き指導者、火引き後継者、野焼き支援ボランティアリーダー）が集まり、全体研修が開催される。

②全体研修（実地）においては、阿蘇グリーンストックの所有する原野にて、火引き指導者が火引き後継者へ実際の火入れの仕方について指導を行い、野焼きを実施する。総監督（統括指導者）の指示のもと作業が開始される。

まず、風の様子をみて、地形及び人員体制等を考慮し、火入れの作業手順について打ち合わせを行う。その後、大きく 2 班に分かれ、火引き及び火消し役が配置につき、総監督の指示のもと火を入れる。

火引きの服装については、難燃性ヘルメット及び難燃性活動服、滑りにくい靴、トランシーバー等を身につけ、安全対策を十分行った上で研修に臨んでいる。



全体研修（実地） 作業開始前の打ち合わせ



全体研修（実地） 火引き指導者の指示のもと実際に火入れを行う火引き後継者





野焼き時に用いるヘルメットと難燃性活動服

③各牧野での火入れ指導について、火引き指導者が図面を見ながら火引きにおける知識や技術及び火入れ手順等について後継者へ伝授する。また、以前延焼及び危険な箇所等について、安全な火入れ方法について後継者へ教授する。ヒアリングの内容をまとめ、引き継ぎ用の記録として残す。



各牧野での火入れ指導及びヒアリング  
各牧野での野焼きにおける、火引き指導者から火引き後継者への知識、技術の継承

④各牧野での野焼きにおいては、火引き指導者のもと、後継者が実際に火入れを行い、野焼きがなされる。地形、風向き、他火引きとのタイミング、火を引く速度等の指示を受け、火入れを行う。

⑤野焼き再開地における火入れにおいては、数十年ぶりに野焼きを再開する牧野が多いため、火入れを行う際には、綿密な計画のもと、細心の注意を払いながら火引き指導者と火引き後継者により野焼きが実施される。事前に現地を調査し、火入れ日、火入れ手順、体制（火引き及び火消し役）を協議した上



各牧野の野焼き 火引き指導者の指示のもと、火引き後継者が実際に火入れを行う



再開地での野焼きの様子

で野焼きに臨む。

最後に、阿蘇では毎年野焼きが実施されているが、地域によっては地元住民の高齢化及び後継者不足により、火引きを担う人材が減少傾向にある。野焼きを行いたくても火を付けていく人（火引き）がいなければ野焼きは出来ない。草原を維持するために野焼きは一つの手段であるが、同時に非常に危険な作業である。近年、全国で野焼き時に火引きが火に巻かれる事故が起きている。

野焼きは基本、1年に1度の行事であり、単年に

何度も経験できるものではない。

同研修において、火引き指導者には、地元牧野(地区)の野焼きの知識や技術を継承してもらい、火引き後継者には、野焼き作業における基本的な知識や手順及び安全管理(装備品等を含めた)を学び、実

地研修や各牧野での野焼きで実際に火入れを経験し、技術を修得してもらうことを目的としている。そして、今後所属する牧野(地区)での野焼きにおいて、火引き役として経験を積みながら活躍してもらうことを期待している。

## 草原をめぐる動き (2017年10月～2018年1月)

- 10/7 戸隠茅葺き宿坊葺きかえ現場見学(場所:長野県長野市戸隠中社地区 戸隠中社宿坊葺き替え現場、連絡先:日本茅葺き文化協会)
- 10/7 自然観察交流会⑦(場所:山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先:乙女高原ファンクラブ)
- 10/7 秋吉台お花畑プロジェクト2(場所:山口県美祢市秋吉台、連絡先:秋吉台草原ふれあいプロジェクト事務局)
- 10/7 第1回大阪府内カヤネズミ一斉調査キックオフ集会(場所:大阪府 日本研修センター十三、連絡先:全国カヤネズミ・ネットワーク)(10/21に第2回モデル調査)
- 10/8 カヤネズミがすむカヤ原復活プロジェクト2017 第4回「カヤネズミのすむオギ原を歩いて秋を楽しもう!」(場所:京都府 桂川河川敷、連絡先:全国カヤネズミ・ネットワーク)
- 10/19 ブラサガラ ～神戸の茅葺き職人サガラさんと、芸北の草原を“ブラブラ”歩こう～(場所:広島県山県郡北広島町 高原の自然館、連絡先:西中国山地自然史研究会)
- 10/21-22 上ノ原の茅刈り(場所:群馬県みなかみ町上ノ原、連絡先:森林塾青水)
- 10/28 ASO 草原フェスティバル(場所:熊本県阿蘇市小里 阿蘇草原保全活動センター、連絡先:阿蘇グリーンストック)
- 10/28-29 長野県小谷村でカリヤスの茅刈りと茅葺きワークショップ(場所:長野県小谷村、連絡先:日本茅葺き文化協会)

- 11/4 自然観察交流会⑧(場所:山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先:乙女高原ファンクラブ)
  - 11/11-12 白川郷かややねプロジェクト～秋の一斉茅刈り～(場所:岐阜県大野郡白川村、連絡先:日本ナショナルトラスト)
  - 11/18-19 茅刈り茅葺きワークショップ(場所:福島県南会津郡下郷町大内宿、連絡先:日本茅葺き文化協会)
  - 11/18-19 茅ボッチ運び出しと山之口終い(場所:群馬県みなかみ町上ノ原、連絡先:森林塾青水)
  - 11/19 千町原 秋の草刈り場所:広島県山県郡北広島町千町原、連絡先:西中国山地自然史研究会)
  - 11/23 乙女高原の草原を守る(第18回乙女高原草刈りボランティア)(場所:山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先:乙女高原ファンクラブ)
  - 11/25-26 茅刈り体験会 カヤカル 2017@美山砂木(場所:京都府南丹市美山町高野地区、連絡先:茅葺屋)
  - 12/2 自然観察交流会⑨(場所:山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先:乙女高原ファンクラブ)
  - 12/10 野焼き支援ボランティア 2017 年度初心者研修会第1回(場所:熊本県阿蘇市小里 阿蘇草原保全活動センター、連絡先:阿蘇グリーンストック)(1/21、2/3、2/10、2/22に第2回～5回あり)
- ※上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

### 全国草原再生ネットワーク ニュースレター vol. 32 2017年10月号

全国草原再生ネットワーク事務局

〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 376-1

NPO 法人緑と水の連絡会議内 Tel. 0854-82-2727 Fax. 0854-84-0262

【編集後記】各地から紅葉の便りが聞かれるようになりましたが、事務局のある大田市にそびえる三瓶山では、ススキが見頃を迎えました。北海道でははやくも初雪が降ったようです。各地では、茅刈りや茅葺きの体験、草刈りの催しなども行われるようですので、参加してみたいかか?